

## 10 南小柿寧一とその家系

石原 力

賛育会清風園診療所・

第二清風園

一八一九（文政二）年十月南小柿寧一が作成した『解剖存真図』<sup>そくしんず</sup>が、二〇〇三年重要文化財の指定を受けた。「この解剖学上の事業は格別の努力でもたらされたので、大いなる称賛を受けるに値する」というシーボルトの推賞文は本図の真価を伝えるものである。慶應義塾大学が所有する原図は一九二五年下谷の文行堂書店から購入したといわれるが、桂川甫賢の所蔵であったと推定されている。

本図の作者南小柿寧一とその家系については、一九三一年田辺密蔵のてん城温故会誌第六回報告以外知られず、他の記述には誤りがみられる。私は昭和二十年代から南小柿家を知るようになり、資料も一九八八年及び最近再びみることができ、現所蔵者の南小柿由巳

子氏から発表についての御諒承もえられた。

現在ある書簡や写本、その他の文書の中では、寧一の父要仙の提出した「親類書」の下書きが、家系を知るのには最も有用である。それによると次のようになる。

①齋藤官七―②（齋藤）官左衛門：③南小柿要仙―④甫祐寧一：⑤甫祐宗宅―⑥宗宅洲吾―⑦四郎―⑧正光―⑨和光

齋藤官左衛門から淀藩家臣となり、南小柿姓への改姓を願い出て、一七八〇（安永九）年五月二一日要仙のとき許可された。伝承では先祖は齋藤道三の孫竜興の家老といわれ、稲葉山城が落城したとき小柿へ逃げ、その南に隠れ住んだので南小柿となったという。小柿は同家では現在岐阜と大垣の間の本巢市小柿としてい  
るが、兵庫県三田市小柿説もある。「親類書」には本図  
近江、また、「祖父官七、江州南小柿村罷在し処六十五年己前病死」とあり、滋賀県栗東市小柿の確度が高い。  
ミナミコガキがいつミナガキになったかは不明（正光氏）。洲吾よりは前であらう。

①官七は一七三〇(享保一五)年没。②官左衛門は一七四一(寛保元)年稲葉正益のとき淀藩藩士となり、翌年岡本金太夫御先手組に勤め御菓子方見習に始まり、四年定江戸勤、最後は御供小姓、八石三人扶持まで出世して、八〇(安永九)年病没。③要仙は五九(宝暦九)年竹沢喜三右衛門の子として江戸に生まれ、妻は相田作兵衛娘で亡くなった後、継妻は檉尾桃三郎姉である。七六(安永五)年外科(科)心懸に付き扶持方二人分、翌年十二月立座小役人医、その後御番医師となり、九八(寛政一〇)年十五石三人扶持となったが、「混合候處勝手」仰付けられ、翌年六月二五日病氣の為隠居し、黙仙と改名。寧一より長生したが没年不明。

④寧一は要仙の嫡男で一七八五(天明五)年江戸に生まれ、幼名芳太郎、通称甫裕(日本洋学編年史の良祐は誤り)、字清人、号西崖、弟次郎作と妹がいた。九年六歳で家督を相続、御医師並の九石四人扶持を与えられた。一八〇一(享和元)年桂川甫周より甫祐の名を頂いている。『存真図』では祐が用いられているが、「親類書」の署名には裕が使われている。しかし祐の箇

所もあり、甫裕と断定はできない。〇五(文化二)年六月桂川に寄宿、稽古料年に三兩宛を与えられ、〇九年三月退塾帰宅。一年五十石、一六年八十石、一八年(文政元)年百石、二三年三九歳で百三十石と異例の迅速加増は彼の非凡と藩の期待を物語っている。日本橋西の居宅は養蘭堂と称し、多くの門人に解剖学を講義した。二〇年一月二五日娘ミキが誕生。二四年一月中旬より病氣療養したが、二五(文政八)年三月七日四一歳で病没。十日付で相田作兵衛から届出された。大槻玄沢の『重訂解体新書』附图の原画を書いたが、没後出版された。菩提所は築地本願寺地中善久寺で、震災後足立区東伊興四一―一一に移った。墓には先祖「代々之墓」とあり南小柿の字はみられない。

⑤宗宅は三一年養子として入り甫祐名跡相続、甫賢の弟子となる。その筆写本が残っている。六六年逝去。

⑥洲吾は四五年二月五日出生。初め宗宅を称し、跡目相続、番医となったが、明治七年洗礼を受け、後牧師となる。七八年一月一四日没。